

四 楊月筆 渡宋天神圖 京都 退藏院藏

紙本墨畫 挂幅裝 八五・五厘(二尺八寸二分二厘)
横 二二・七厘(七寸四分九厘)

楊月は知らるゝ如く、本朝畫史に薩州の人にして笠置寺に居り、周文雪舟を師としまた牧溪を慕ひて山水人物花鳥を描き、印文に「臣僧楊月」、「和玉」を用ひたと傳へ、眞珠菴藏宗賢の畫傳には釋氏巨僧と稱して相國寺に住し、牧溪に學んで墨潤を得たと云ひて、未だその更歷を詳にせざる畫僧である。而も世上に楊月の筆と稱するもの必ずしも尠からず、畫印また一二種に止らない。尙又その訛傳なりや否やは知ず、別に畫工便覽の楊月を相州鎌倉建長寺の僧にして啓書記を學び兼て元信の風格ありと云ふありて、或はその一人に非らざるかを思はしめるものがある。唯「臣僧楊月」の白文長方印を載せて世に著名なる畫跡には高野寶壽院所藏の瓜筍圖二幅東山水墨畫 集第三輯國華第一六四號所載大阪平瀬

渡宋天神圖印記(寸原) 氏所藏の山水圖があり、また禪居菴の布袋圖は印には白文「楊月」の二字のみを見るも、款に「釋臣楊月書畫之」とありて同じく此の人

の標準の一作に加へられてゐる。而してこの圖またこの「臣僧楊月」印に「和玉」印すら連捺して正しく所謂笠置楊月の筆なるを明かにして居り、而もその畫法に未だ之等の諸作に見ざる一面を示してゐる。即ち彼の畫風は本朝畫史、宗賢畫傳共に滋潤の體を得たと評する所であつて、就中瓜筍圖は墨氣用筆並びに輕爽の致を極めて、尤もその特色を看るに足るが、この圖は禪居菴の布袋と同じき人物畫ながら、彼の法を和尙に得たる逸格の草筆なるに似ずして、北野神君の靈容を寫して畫趣あくまで溫秀である。その衣襪に沿ふ淡暈に和して全周に一抹せる外隈の輕致は以て彼の用墨の巧を知るに足るが、更にその寫貌の

一一一

謹恪は、衣襪線の秀潤と相俟つて畫技の周到を徴して餘りがある。像容また佇立する通途の形に據らず、やゝに歩を運んで衣端の風に搖げるも、この空想裡の畫材を寫してよくその眞情を傳へたるものにして、以て當代に數多き斯像の遺作中の一優品と稱すべきであらう。想ふにかの平瀬氏所藏山水圖に希世靈彦西紀一四八九致の文明十八年西紀一四八六の贊を載するに徴すれば、斯の人恐らく祥啓と殆んど時を同じくして東西に出で、別にこの滋潤の一體を得たものである。未だその畫系を知らざるも、畫史に榮普齋、長柳齋等を擧げて畫趣相俾しきを云ふを見れば、或はその流風を逐ふもの尠からざりしものであらう。

風流和尙著冠巾 半是春閨夢裡人
帶得凌霄峰頂月 梅花枝上現全身
葛藤菴主拜贊

の一詩がある。また當代の一佳吟に加へ得るが、寡聞にしてこの詩並に葛藤の菴號共に徴し得ず印文も未だ讀み得ない。書體やゝかの靈彦に通ふかに見え、或はその一流に屬すべきを思ふのみである。偏に博雅の示教に俟つ。(渡邊)

五 豐彦筆 觀月圖 東京 大塚稔氏藏

絹本青色 挂幅裝 一〇五・〇厘(三尺四寸六分)
横 四〇・八厘(一尺三寸四分六厘)

豐彦は云ふ迄もなく四條派の祖吳春門下の錚々、師の歿後京師に於て景文と並び稱せられ、就中山水を善くした。古人も「莊村畫山水深得三烟靄出沒之態」畫乘と評してゐるが、茲に掲ぐる松下觀月圖の如きはその優作の一に推し得るであらう。その圖様を見るに、懸崖の下、烏帽白衣の一高士あり、童子を從へて水邊の岩上に坐す。前方の水際模糊として煙靄の彼方に消え、月は中天に昇らんとして光輝漸く勝り、斷崖危松の枝に懸つて樹葉爲めに彌々けざやかに、折しも何やらん枝より零るゝを高士は仰ぎ瞻てゐる。此圖は即ち月夜靜中動の瞬間を捉へんとしたものであらう。